

親と子どものチャレンジ・キャンプ ～ファーストステージ～

■ 事業のねらい

子どもが、自ら考え進んで行動する場面を見ることで、親が我が子の成長を認め、子育てをしていく上での親の在り方を考えるきっかけとする。



- 実施日 平成23年5月28日(土)～29日(日) 1泊2日
- 参加対象 小学1年生～3年生の子どもと保護者 15組(30名程度)
- 参加実績 参加者: 20名(9家族)
 - 小1=4名、小2=2名、小3=3名
 - 保護者=10名、幼児=1名
 - 男子=9名、女子=11名
- 運営協力者: 3名
ボランティア=3名
- 備考 活動場所: 厚岸少年自然の家及びその周辺

1 事業実施の背景



家庭はすべての教育の出発点であり、子どもが基本的な生活習慣・生活能力、倫理観、自立心や自制心、社会的なマナーなどを身に付ける上で重要な役割を果たしている。しかし、近年の都市化や核家族化、少子化、地域における地縁的なつながりの希薄化など、家庭や家族を取り巻く社会状況の変化の中で、家庭の教育力の低下が指摘されている。平成20年度に文部科学省が行った「家庭教育の活性化支援等に関する特別調査研究」においても、約8割の親が家庭の教育力の低下を感じている。

本事業は、小学1～3年生の児童が、2日間子どもだけで路線バスを使った買い物や夕食づくりを行う。その間、保護者は、子どもの活動と近接する会場においてワークショップや交流会を行い、日頃の子どもの接し方について考える機会を提供するとともに、子どもが事業で得た自信や学びを親子で共有し、子どもの成長について考えるきっかけづくりを目的とする。

2 プログラムデザイン

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
5/28 (土)	子どもコース				受付	開会式	調理計画	持参屋食	荷物移動	買物確認 道具準備	買い物に行こう	夕食づくり		夕食	入浴	自由	就寝準備	就寝
	保護者コース									趣旨説明	お菓子づくり	ワークショップ① 夕食づくり見学	後片付け		入浴	保護者交流会	就寝準備	就寝
5/29 (日)	起床	洗面	朝食	荷物移動	点検	ふりかえり	親への手紙	閉会式	11:30 解散									
	床	掃除	食	移動	検		ワーク ショップ②											

■ アクティビティについて



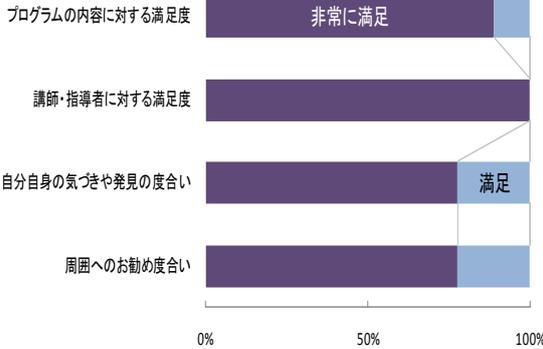
■ 企画の意図

- 普段当たり前のように保護者にしてもらっている毎日の食事作りやそのための買い物等を子どもたちが自らの手で行うことによって、保護者への感謝の気持ちを育むとともに家庭の大切さに気付かせる。
- 自分のことは自分でやろうとする気持ちを持たせ、子どもの成長や自立を促すきっかけとする。
- 近接する場所で親子が別々のプログラムに取り組むことによって、保護者は我が子やまわりの子どもたちの様子を随時観察し、これまでの我が子との接し方を振り返るきっかけとする。

■ 留意事項

- 親の力を借りず子どもたちだけで路線バスを使った買い物や調理に取り組ませるため、移動方法や刃物・火気使用に伴う安全管理体制を綿密に計画した。
- 北海道教育大学の学生ボランティアを3名配置し、職員5名と合わせて8名で子どもたち9名を支援する体制を整えた。

3 活動の様子



4 事業評価



5 まとめ



■ 活動の様子

初日、子どもたちは路線バスを使って、町内のスーパーへ夕食の食材探しに出かけた。参加者の多くは、スーパーで買い物をした経験がなかったが、店員に目当ての商品が置かれている場所を聞いたり、商品の量と価格を比較し、「こっちのネギのほうがいいよ」と仲間に教えたりする者が出てくるなど、初めての経験を果敢に乗り越えていった。

買い物から帰った後は夕食づくりに取り組み、そのメニューは餃子とチンジャオロース、麻婆豆腐、中華スープ、杏仁豆腐、ご飯の6点であった。包丁を使ったことがない子どもが多い中ではあったが、ピーマンの細切りや餃子包みなど自分たちの手で全て行った。

保護者はその間、子育てに関するワークショップや、閉会式で我が子にプレゼントするスイートポテト等のお菓子づくりに取り組んだ。

閉会式以降、はじめて親子が同じテーブルについた夕食会では、「この餃子、私が包んだの」「僕が切ったタケノコだよ」と食べることも忘れ、誇らしげに保護者へ伝える子どもの姿と、微笑ましく頷く保護者の姿がどのテーブルでも見られた。

翌日は、2日間の活動をスライドショーで振り返るとともに、親子で手紙を交換し合い事業を終了した。

■ 参加者（小学生）の声

- ピーマンを切れるようになった。（小1）
- ほうちょうやギョウザつみみをがんばりました。（小2）
- お母さんがおいしいって言ってくれてうれしかったです。（小3）

■ 参加者（保護者）の声

- 子どもの成長を感じられた。（母）
- 路線バスを使った買い物や料理など、普段見られない我が子の一面をみる事ができた。（父）
- 同じ位の子を持つ親たちと交流し、皆同じ思いや悩みを持っていることが分かり、気持ちが少し楽になった。（母）

■ 参加者の変容【IKR調査結果】

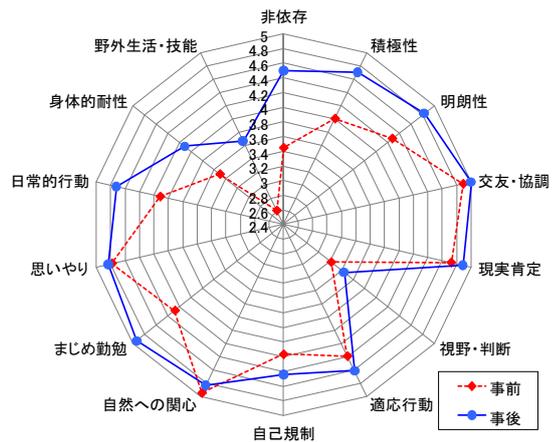
全体としては、6.2ポイントの向上的変容が見られた。

大きな変容を示したのは、「非依存性」及び「野外生活・技能」であり、ともに1.06ポイント、続いて「積極性」が0.71ポイント、「まじめ勤勉」は0.67ポイントの向上が見られた。

■ 結果の分析・考察

「非依存性」の向上については、保護者の力を借りず子どもたちだけで路線バスを使った買い物や調理等を行ったことにより、自主性を身に付けたものと推測できる。

「野外生活・技能」については、子どもたちだけで包丁やフライパン等を使った調理活動、布団の上げ下ろし等を行ったことにより、生活技能を獲得したものと推測する。



■ 成果

- 子どもだけでの買い物や包丁・フライパンを使った調理等、家庭生活の延長上でやや難易度を上げた活動に取り組むことにより、子どもたちは必然的に仲間と協力しつつ、達成感・成就感を味わうことができた。また、この取組をお礼の手紙や感謝の言葉等で保護者からフィードバックされたことによって、今後、家庭でのお手伝い等の高まりが期待できる。

- 親子事業ではあるが、開閉会式、食事、ふりかえり以外の全ての時間において、近接する場所で親子が別々の活動に取り組むプログラム構成とした。このことによって、保護者が随時我が子や他の子の様子を観察することができ、保護者の「子ども観」を見直すきっかけとすることができた。アンケートには「成長を実感できた」「何もできないと思っていたが、うちの子もやればできるということが良く分かった」等の感想が寄せられた。

- お菓子作り、ワークショップ、交流会と段階を追って保護者同士の親交を深めたことにより、交流会では日頃の子育てに関する思いや悩みを十分に交流することができた。アンケートには、「皆同じ悩みを抱えていることが分かり、心が少し軽くなった」と多くの保護者が感想を寄せていた。

■ 課題・今後の方向性

- アンケートや聞き取り調査から、保護者の多くが今まで子育てに自信を持って不安や悩みを抱えていたこと、また、この事業への参加をとおして我が子の成長を実感し、自信を回復できたことが分かった。しかし、参加者が親子9組20名と少数であったため、今後、参加を得られなかった保護者へ事業の成果を広めるような方法を検討する必要がある。